様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　８ 日現在

機関番号：２４５０６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０２１４５

研究課題名（和文）現象学的方法による観光の倫理的問題の明確化―観光倫理学の構築にむけて

研究課題名（英文）Clarifying ethical issues in tourism through phenomenological methods: Towards an Ethics of Tourism

研究代表者
紀平　知樹（Kihira, Tomoki）

兵庫県立大学・看護学部・教授

研究者番号：７０３４６１５４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は現象学的方法を用いて観光の倫理的問題を明らかにすることを目的としていた。そのためにおこなった研究として、（1）観光経験の現象学的分析の足場づくりと（2）観光倫理学はどのような倫理学としてありうるのかという観光倫理学の可能性についての考察を行った。（1）の研究では、フッサールの意志行為の現象学がまさに「パリへ旅に出る」という経験を分析しており、その分析を観光経験の現象学的分析として提示できることを明らかにした。（2）については、観光倫理学は観光に関わる行為を規制するものとしてだけではなく、まさに観光のエートスを明らかにするための学として提示する可能性を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　COVID-19の影響により観光は一時下火になったとはいえ、観光客は年々増加し、経済的な意義はいうまでもないが、文化的、社会的にも大きな意味を持っている。しかしそれと同時に、観光にまつわる弊害が見えても来ている。そうした動向を踏まえて、欧米ではすでに観光倫理学研究が進められているが、我が国ではまだ研究は多くはない。そこで観光倫理学を我が国にも定着させるため、本研究では観光における倫理的問題を明らかにしようと努めてきた。従来の観光倫理学は観光行為を規制するためのルール作りに主眼が置かれていたが、本研究では観光という営み自体がもっている動向から観光の倫理を明らかにしようとした点に意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study aims to identify ethical issues in tourism using phenomenological methods. The research conducted for this purpose included (1) the framework of a phenomenological analysis of the tourism experience and (2) a consideration of the possibilities of a tourism ethic, i.e., what kind of ethic a tourism ethic might be. For the study (1), we found that Husserl's phenomenology of acts of will analyzes the experience of " traveling to Paris" itself. Therefore we can find it as a phenomenological analysis of the tourism experience. Concerning study (2), the study revealed the possibility of presenting tourism ethics not only as a regulation of tourist acts but precisely as a study of revealing the ethos of tourism.

研究分野：哲学

キーワード：観光倫理学　現象学　ポスト現象学　応用倫理学　エートス

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究課題が採択された当初(2017 年)､観光は年々その重要性を増してきていた｡例えば 2017 年の訪日外客数は 2800 万人を超え過去最高であった。世界的に見ても同様の傾向が見られ、観光は特に経済的に大きな意味を持つ産業となっていた。そうした中で観光をめぐる様々な弊害も見受けられるようになり、従来のマスツーリズム(大衆観光)からオルタナティブな観光、あるいは持続可能な観光という理念が語られるようになった。さらに 21 世紀の初め頃から、観光に起因する弊害との関係で、観光の倫理的問題に焦点を当てる研究が欧米では始められることとなった。そうした研究が徐々に観光倫理学という応用倫理学の新たな分野を確立しつつあった。翻って我が国では、観光の倫理的問題に関する言及はわずかに散見されるのみであった。そのため、まずは我が国で何が観光の倫理的問題になり得るのかを明確にする必要があった。

２．研究の目的

本研究課題の目的は、上述したように、観光の倫理的問題を明確に示すことである。この目的に到達するために、いくつかの課題を克服する必要がある。

（１）倫理的問題を提示するために観光という現象にアプローチするための方法である。これまで観光研究は人類学や社会学、経済学、地理学などの分野で研究が進められてきた。それに対して本研究課題では、哲学/倫理学の立場からアプローチしようとしてきた。そして特にそのための方法として現象学を採用している。観光研究においてもすでに現象学を分析方法として用いた研究は存在しているが、しかしそうした研究においてはさまざまなアイデアが寄せ集められているだけであるとの指摘(1)もある。そこでたんにデータを分析するための手法として現象学を用いるのではなく、哲学としての現象学そのものから観光についてなにが言えるのかを考察することが必要である。

（２）哲学としての現象学から、質的研究の方法としての現象学へと移行し、観光経験を現象学的に分析するために、方法面で考察が必要である。

（３）観光倫理学は応用倫理学の一部門と考えられるが、観光倫理学は応用倫理学として何を問題にしてきたのか、そしてそれが十分な考察であったのかを確認することが必要である。

上記（１)、(２)、(３)の課題を踏まえた上で、観光の倫理的問題を明確に示すことになる。

３．研究の方法

本研究課題では、主として文献研究を通して上記目的を達成するように努めた。すなわち、「観光経験の現象学」、「質的研究の方法としての現象学的方法についての考察」、「応用倫理学としての観光倫理学」という三つのテーマに関して文献研究を行った。また本研究課題では、インタビュー調査も含まれており、その準備的な調査も行っていたが、COVID-19 の影響により、観光という営み自身が停滞し、インタビュー調査も断念することとなった。

４．研究成果

本研究課題の成果は以下の通りである。

（１）哲学としての現象学と観光

観光経験を哲学としての現象学のテーマとして扱うための手がかりとして、フッサールの意志行為の現象学における「パリへ旅する」という経験の分析を参考にした。フッサール現象学における経験の分析の基本的な枠組みは意識の志向性に基づく分析である。意識の志向性とは、意識は常に何かについての意識であるというその特性を示す名称である。何かとは意識の対象のことである。意識は対象を受動的に受け取るところから始まるが、意志行為においては、対象は創造されるという点で他の意識と区別される。旅をするという経験は意志行為であるので、その経験の対象は意志によって創造される。もちろんその創造は自由な創造ではない。私たちは旅に出る前に、その旅の目的を知っており、ガイドブックなどを通して旅先でどのようなものに出会うのかもあらかじめわかっている。そして私たちが旅に出かけ、さまざまなプロセスを経るごと

にその対象は徐々に現実化していく。しかし、それは単なる再現ではなく、むしろあらかじめ与えられた対象を新たな意味において経験することであり、そこに創造性を見いだすことができるであろうことを明らかにした。またこのようにして観光という現象が意志行為という倫理的意味を持つ経験と関わりうることも明らかにした。

（２）質的研究の方法として現象学

現象学は哲学としてのみならず、質的研究の方法としても用いられており、観光研究以外でも看護学や教育学などさまざまな研究領域において用いられている。しかしそうした研究においては、なにをもって現象学といえるのかということが明確ではないということがたびたび指摘されている。本研究課題ではフッサールの現象学を質的研究の方法として改変している米国の現象学的心理学者ジオルジの分析方法を明確化することに努めた。ジオルジはフッサールの現象学に対して二つの点で変更を加えている。ひとつは超越論的ではなく、心理学的なレベルで分析をすることであり、もうひとつは普遍的本質を求めるのではなく、経験の構造を明らかにするということである。またジオルジの研究方法においてはフッサールの自由想像変容による本質直観の理論が用いられていることは、これまでも指摘されていたが、本研究課題においてはそれに加えて、経験の構造を特定するためには、フッサールの全体と部分の理論の理解が必要であることを明らかにした。

（３）応用倫理学としての観光倫理学

観光とは複合的な現象であり、ホスト-ゲストという人と人との関係であったり、ゲストと観光地という人と環境の問題であったり、観光を企画する産業のもつ倫理的問題であったり、倫理的問題といっても多様な問題が考えられる。応用倫理学は生命倫理学や情報倫理学、経営倫理学、環境倫理学など様々な領域において成立しているが、観光倫理学はその中では後発的な領域である。そのため、観光倫理学がどのような応用倫理学となりうるのかを考察する必要がある。本研究課題では観光倫理学に親和性が高いと考えられる環境倫理学との関わりについて考察を行った。

①とくに観光の一形態であるエコツーリズムと環境倫理の問題について検討した。エコツーリズムとは、持続可能な観光の一形態である。しかし持続可能性という概念自体が多義的であるため、エコツーリズムがどのような意味で持続可能な観光なのかを明らかにする必要がある。そのため、エコツーリズムの理念に立ち返り持続可能性との関係を考察した結果、エコツーリズムは強い持続可能性の理念を採用すべきであることを指摘した。またエコツーリズムにおける観光地のオーバーユースの問題は、環境倫理学における共有地の悲劇の一つのバージョンであることを明らかにした。また、観光における環境の価値の問題は、古典的な環境倫理学が採用していた内在的価値/道具的価値という二分法では適切に扱えないことも指摘した。また共有地の悲劇の問題は、ゲーム理論の囚人のジレンマのモデルによって考察可能であるという指摘[(2)]を踏まえて、観光地に関わる関係者が協調行動をとれるようになるための対話の場の必要性についても指摘した。

②次に観光倫理学は応用倫理学としてどのような倫理学であり得るのかということについて考察した。応用倫理学は一般的に倫理原則を現実的な問題に適用して一定の倫理的判断を導くものであると考えられている。確かに応用倫理学は現実の問題への対応の中から生まれた理論であるといえるが、しかし同時にその時代やその社会において支配的な価値観を批判的に検討するという性格ももっている。観光倫理学は欧米では研究が盛んになってきているとはいえ、いまだ黎明期でもあり、やはり個別の問題事象に関する規制としての倫理という意味合いが強い。翻って、これまでの観光研究をみてみると、観光を近代社会をとらえる一つの視座としていることがわかる。すなわち、観光とは近代を象徴する一つの事象である。そこで観光のあり方(エートス)そのものを考察することで観光の倫理的問題を明確に示す道が開ける可能性があることを明らかにした。また観光が技術や道具の媒介によって成り立っているとするなら、そうしたものがもつ意味を明らかにしていくことが必要であることも明らかにした。

参照文献

(1) Szarycz, G. (2009). Some issues in tourism research phenomenology: a commentary. *Current issues in Tourism*, 12(1), 47-58.
(2) 松井彰彦. (2010). 高校生からのゲーム理論. 筑摩書房.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 紀平知樹	４．巻 17
２．論文標題 観光経験の現象学	５．発行年 2020年
３．雑誌名 フッサール研究	６．最初と最後の頁 1－17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 紀平知樹	４．巻 48
２．論文標題 環境アイコンの生成と価値の調整	５．発行年 2018年
３．雑誌名 倫理学研究	６．最初と最後の頁 18-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24593/rinrigakukenkyu.48.0_18	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 紀平知樹	４．巻 10
２．論文標題 観光のエートス ー 観光倫理学の可能性に関する考察	５．発行年 2022年
３．雑誌名 観光学評論	６．最初と最後の頁 97-111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 紀平知樹	４．巻 30
２．論文標題 経験の構造 － Giorgiの現象学的心理学の方法 －	５．発行年 2023年
３．雑誌名 兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要	６．最初と最後の頁 15-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 紀平知樹
2．発表標題 観光のエートス：観光倫理学のいくつかの可能性
3．学会等名 観光学術学会（招待講演）
4．発表年 2022年

1．発表者名 紀平知樹
2．発表標題 観光経験と意味の再創造―意志行為の現象学の観点から
3．学会等名 観光学術学会
4．発表年 2019年

1．発表者名 紀平知樹
2．発表標題 観光経験の現象学ー記述か解釈か？
3．学会等名 観光学術学会
4．発表年 2018年

1．発表者名 紀平知樹
2．発表標題 観光経験の現象学的考察
3．学会等名 フッサール研究会
4．発表年 2019年

１．発表者名 紀平知樹
２．発表標題 「問題」としての変則事例：環境アイコンの生成と価値の調整
３．学会等名 関西倫理学会2017年度大会（招待講演）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計2件

１．著者名 吉永明弘、寺本剛	４．発行年 2020年
２．出版社 昭和堂	５．総ページ数 259
３．書名 環境倫理学	

１．著者名 伊藤邦武、藤本忠、田中龍山、山口雅広、松田克進、紀平知樹	４．発行年 2018年
２．出版社 晃洋書房	５．総ページ数 232
３．書名 哲学ワールドの旅	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関